

## 令和7年度第1回辰野町塩尻市小学校組合総合教育会議及び 塩尻市辰野町中学校組合総合教育会議会議録

令和7年度第1回辰野町塩尻市小学校組合総合教育会議及び塩尻市辰野町中学校組合総合教育会議が、令和7年10月1日、午後2時55分、小野農民研修センターに招集された。

### 会 議 日 程

- 1 開 会
- 2 組合長あいさつ
- 3 教育委員会あいさつ
- 4 協議事項  
(1) 両小野の今後の教育環境について
- 5 閉会

#### ○ 出席者

##### 【小学校組合】

組合長	武居 保男
教育長	宮澤 和徳
教育長職務代理者	小澤 晃
委員	小澤 秀樹

##### 【中学校組合】

組合長	百瀬 敬
教育長	佐倉 俊
教育長職務代理者	両角 東平
委員	小幡 洋美

#### ○ 説明のため出席した者

両小野小学校長	根橋 ほなみ
両小野中学校長	富田 章

#### ○ 事務局職員出席者

##### 【辰野町】

学校支援課長	竹村 智博
学校支援課課長補佐 (教育総務係長)	宮原 隆史
学校支援課教育総務係	中沢 大輔

##### 【塩尻市】

こども教育部長	百瀬 一典
こども教育部次長 (こども未来課長)	竹中 康成
学校教育課長	上條 崇
教育施設課長	五味 克敏

学校教育課課長補佐 (児童生徒支援係長)	小松 義宏
学校教育課課長補佐 (教育企画係長)	浅川 忠幸
学校教育課学校運営係長	牧野 令
学校教育課教育企画係 主事	瀧沢 快斗

## ○ 本日の会議に付した議事

会議日程に記載のとおり

### 1 開 会

**百瀬こども教育部長** 定刻となりましたので、ただいまから、辰野町塩尻市小学校組合と塩尻市辰野町中学校組合合同の令和7年度第1回総合教育会議を開会いたします。よろしくお願いいたします。

今年につきましては、塩尻市辰野町中学校組合教育委員会事務局が当番になっておりますので、私、塩尻市こども教育部長の百瀬と申しますが、私のほうで進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、次第に従って進めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

### 2 組合長あいさつ

**百瀬こども教育部長** 初めに、両組合を代表しまして、百瀬中学校組合長から御挨拶をお願いいたします。

**百瀬中学校組合長** 皆さん、こんにちは。今年は中学校組合が当番ということでございますので、私から開会に当たりまして御挨拶を申し上げます。武居組合長、教育長、教育委員の皆様、本日はそれぞれ御多忙のところ、御参集いただき誠にありがとうございます。

本年度も両小野小学校及び両小野中学校では、小中一貫教育を発展させていくため、小学校・中学校合同の職員会議を開催したと聞いております。会議の中では、小中一貫の行事や地域との連携、9年間でつきたい力などについて各研究部会で研究し、両小野地域のさらなる教育の充実に向けて活発な意見交換が行われたと承知しております。今月10月24日には、両小野学園音楽会が予定されております。両小野地域で学ぶ子どもたちが、学級・学年・学校を越えて交流ができることは非常に貴重な機会であると認識しております。堂々と発表し合ってもらいたいと思います。

しかしながら、両小野小学校及び両小野中学校ともに児童生徒数が減少しており、児童生徒数の減少は学校教育活動に様々な影響をもたらしています。ここ2年間の総合教育会議では、両組合長と両教育委員会が現在の状況を認識し、クラブ活動や部活動などの観点から今後の学校の在り方について意見交換をしまいいりました。昨年度までの会議を踏まえると、現時点では、特色のある両小野地域の学校の在り方は、児童生徒や保護者、地域住民などの意見を聞きながら検討していくべきであると認識しております。

また、昨年度の総合教育会議を受けて、現在、地域住民を中心に両小野地域の学校の在り方について検討を始めようという動きがあることを理解しております。本日は、両小野地域の今後を見据え、これまで出された意見を再確認し、様々な観点から今後の教育環境の整備について御意見をいただき、子どもたちへのさらなる支援につなげたいと考えております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。

### 3 教育委員会あいさつ

**百瀬こども教育部長** 続きまして、両組合教育委員会を代表しまして、宮澤小学校組合教育長から御挨拶をお願いいたします。

**宮澤小学校組合教育長** 皆様、こんにちは。中学校組合長の百瀬様、小学校組合長の武居様、大変お忙しい中を両組合総合教育会議に御出席いただきまして、大変ありがとうございます。

今話がありましたように、急激に進む少子化の中、両小野地区の今後の教育環境についてをテーマとさせていただきます。昭和28年、72前に誕生した組合立の両小野小学校と両小野中学校は、今日まで輝かしい歴史と伝統、文化を築き、多くの立派な方々を輩出してきました、時代が昭和から平成、令和と移る中で少子化が進み、児童生徒数が年々減少し、小中学校の特に課外活動や中学校の部活動への課題が大きくなってきております。学びの集団も縮小、活動への制約も出始めてきた中で、地元両小野地区の住民や、両小野小中学校を支えている学園運営協議会からも学校の在り方についての指摘がされるようになってまいりました。現在、学園運営協議会を中心に、地域に学校の在り方を検討する会を立ち上げよう、地域住民の声を聞こうと、そういう動きが出てきていることは大変ありがたいことでございます。

この少子化に伴う学校の在り方については、令和5年度の総合教育会議から毎回、様々な角度から御意見をいただいております。かつて経験したことのない人口減少社会に突入していますけれど、どんな社会になろうと、今、各小中学校で学んでいる児童生徒の教育環境は保障されなければなりません。

両小野小、両小野中も、今後ますます児童生徒数が減少していくと、子ども同士の関り、同年代の子ども同士が力を合わせ、皆で何かをつくり上げたり、協力して成し遂げたりするダイナミックな活動や、逆に、子ども同士の意見の付き合い、葛藤、時にはけんかをする事等、子どもの世界では当たり前な経験ができないことは混迷を深め、答えが見つからない社会、答えが一つではない社会にあって、自ら課題を見つけ、自分なりの答えを持ち、生き抜いていかなければならない子どもたちにとって不幸なことで、時には泣かされたり、泣かしたり、お互いに教え合ったり、教えられたり、共に苦しんだりする体験、子ども時代には必要ではないかと思えます。

また、生徒数が減少するという事は、特に中学校においては、部活動が維持できない。これは先ほどの中学校組合教育委員会でも随分出されておりました。やりたくても活動する部活がないということがさらに起こってまいります。中学校3年間の成長は目を見張るものがあり、精神的にも肉体的にも最も成長するこの時期、熱中できる活動を保障し、その後の人生の土台づくりができたらと思えます。ですから、生徒数が減少しても、やりたい活動を保障してあげたいという、一見矛盾したことが求められています。この両小野という地区では、言うのは簡単ですが、行うとなると、なかなか厳しいものがございます。

過去2回の総合教育会議において触れていなかった部分について、今日、私から一つ提案させていただければと思っております。この両小野小、両小野中学校の在り方を考える際、学校組合をどうするかということも大変重要ではないかと考えております。ここの部分については、今まで、過去にあまり議論されてまいりませんでした。

昭和28年以降、辰野町と塩尻市において、学校組合を組織し今日まで来ていますが、組合立の学校には、例えば上田市と長和町との組合立の依田窪南部中学校、松本市と朝日村、山形村とで組合立の鉢盛中学校などのように、ブロック・広域行政圏が同じ学校があります。一方、この両小野小中学校の場合は、南信に位置する辰野町、中信に位置する塩尻市とでブロック・広域行政圏が異な

り、小学校と中学校を管轄する教育事務所も異なる。郡市校長会も、小学校は上伊那の郡市、中学校は松本・塩尻・東筑摩の郡市校長会に所属しています。先生方の人事も基本、上伊那と松本・塩尻・東筑摩とに分かれて行われます。

上伊那を例に挙げますと、先生方の人事異動、各種研究会、先生方の会議、学校行事や学年行事の調整などは、小学校・中学校含め、上伊那全体で実施しますし、調整が必要なものはすぐにその場で調整も可能です。また、コロナ禍のような突発的な事態に突然遭遇しても、上伊那全体で全ての小中学校において情報共有を図ることができ、対応策の徹底なども迅速に行われます。このことは、松本・塩尻・東筑摩の郡市においても同様であろうと思います。

当然このことは、近い距離にある両小野小学校と両小野中学校間でも行われていかなければならないわけですが、両学校に入る情報や指示は、小学校は上伊那郡市のもの、中学校は塩尻市側の郡市のものが入ることになります。ブロックが異なる、広域行政圏が異なる場合の連動になってまいります。人事異動をはじめ、先生方の会議や研究会、学校間の調整なども行政圏をまたがると迅速な対応ができにくくなると思います。

私は今でも忘れません。2020年、令和2年2月27日、当時の安倍総理による非常事態宣言の発出、全国一斉に学校を閉じる臨時休業措置が指示され、以来、学校と教育委員会は徹底したコロナ禍への対応策が求められました。当時は、コロナウイルスの知識も乏しい、ワクチンもない。ただ死亡率が高く、その中で岡江久美子さん、志村けんさんが相次いで亡くなり、感染すると命に関わるという状況で、日本中がパニック状態。みんなピリピリしておりました。

このとき、両小野小学校と両小野中学校はどうするかということ、当時の塩尻市の赤羽教育長と私は何回も連絡を取り合い、相談をし、最終的には、両小野小学校の校長が辰野町側の情報を持ち、両小野中学校の校長が塩尻市側の情報を持って、両者が協議し、両者で協議決定した内容を辰野町教育委員会も塩尻市教育委員会も尊重していこうということを決めました。

この事例から見えてくる課題としては、学校組合も、ブロック・広域行政圏が同じならば何ら問題はありますが、南信、上伊那と中信、松本・塩尻・東筑摩と異なる場合は、なかなか連携や情報共有が難しく、コロナ禍のような想定外の事態が突然発生したような場合は、対応が難しくなるということです。今後も、突発的に想定外の事態がいつ起こるかは分かりませんが、起こる可能性はあります。

両小野小学校、両小野中学校が、この2つのブロック・行政圏にまたがり、2つの教育事務所、人事も全く別という中、今後の少子化、社会の急激な変化、人々の価値観の変化、突然の事態への対応等を考えますと、この先においても、今のような組合立でよいのか。あるいは、ほかの方法はないのか。一度立ち止まって検討していく必要があるのではないかと考えます。そして、この2つの学校、保育園を含めた両小野学園の在り方について、どのような教育環境整備が必要なのか、地域住民と共に考えていくことが大切であると考えています。

ただ、大事にしなければならないことは、今も、この先も、子どもたちの学びの環境は維持されなければならないこと。子どもたちに、学校の在り方で不安を与えてはならないこと。これだけはお互い肝に銘じておきたいと思います。大変長くしゃべってしまいました。失礼しました。今日はよろしく願います。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。

それでは議事に入る前に、総合教育会議について、簡単に御説明をさせていただきます。この会議は、平成27年に施行されました教育委員会制度の大きな改革の一つでありまして、その改革の中で、予算編成や執行、条例案の提出などを通じて、教育行政において重要な役割を担っている首長部局と教育委員会の間で、十分な意思疎通を図り、教育に関する重要な施策や目指すべき姿などに

ついて協議、また、情報共有することを目的としております。

ぜひ忌憚のない御意見をそれぞれお聞かせいただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしいたいと思ひます。

#### 4 協議事項

##### (1) 両小野地域の今後の教育環境について

**百瀬こども教育部長** それでは協議事項に入ります。(1) 両小野地域の今後の教育環境についてを議題といたします。

まず事務局から説明をさせていただきます。その後、教育委員、学校長、教育長、首長の皆さんにそれぞれ、今お感じの御意見をお伺ひして、本日の会議終了を、14時45分をめぐりとして進めさせていただきますのでよろしくお願ひしいします。

それでは、協議事項の両小野地域の今後の教育環境について、事務局から説明をお願ひしいします。

**上條学校教育課長** 事務局をしております、塩尻市辰野町中学校組合学校教育課長の上條です。よろしくお願ひしいします。

それでは、お手元にお配りしました資料の説明をさせていただきます。本日の総合教育会議の議題とし、両小野地域の今後の教育環境についてを提案させていただきました。

まず、1ページ目を御覧ください。これまでの両小野学園の経過と背景についてまとめてございます。ここ2年ほど同様の議題で御協議いただひておりましたが、今年度に入り、地元の両小野学園運営協議会において、地域として今後の学校の在り方を検討していきたくとの意向が示されました。これを受け、協議会内に検討会を設置する予定となったことから、行政といたしましても改めて、両小野地域の今後の教育環境について御協議いただひくものです。

続きまして、2ページ目を御覧ください。こちらは両小野地域の人口推移でございます。現在の児童生徒数がそのまま進級した場合、また、住民基本台帳上の子どもが全員入学すると仮定した場合の人数を示してございます。御覧のとおり、今後も児童生徒数は減少傾向が続く見通しです。こうした状況を踏まえ、地域として学校の適正規模や適正配置をどのように確保することが子どもたちにとって最も望ましいかを検討していきたく意向となったものでございます。

続きまして、3ページ目を御覧ください。学校再編等を考えるに当たり、適正規模と適正配置についての基本的な考え方でございます。児童生徒の教育環境をよりよくすることを最優先とし、保護者や教職員、地域の皆様の意見を伺ひながら判断してまいります。また、学校は防災や地域交流の拠点でもありますので、地域の実情を十分に踏まえることが重要であると考えております。

続きまして、4ページ目を御覧ください。両小野小学校と両小野中学校の現状でございます。少子化の進行に伴ひ、学級数や児童生徒数が減少し、教育活動や学校運営に影響が出始めている状況が示されております。

続きまして、5ページ目を御覧ください。ここ2年間の総合教育会議で御協議いただひたポイントを整理してございます。教育条件の向上と地域コミュニティの維持、そして両組合長と教育委員会の共通認識などが示されております。

最後になります。6ページ目を御覧ください。今後、組合立の学校再編を行うとした場合の一般的な例を4つほど御提示しております。あくまでも例となりますが、次のような方法が考えられます。

まず、①になります。1つ目として、施設一体型の義務教育学校として再編するケースでございます。既に小中一貫の取組は行っておりますが、施設分離型であるため、よりまとまった9年間の学びが提供できる施設一体型とする方法でございます。

2つ目として、小学校のみを残し、中学校は各市町の学校へ通学するケースでございます。幼年期の教育を重視して、小学校を存続させ、中学校は各市町の学校へ通学します。中学校の一部の部活動は既に合同部活が行われており、今後は部活動全体が地域展開へ移行する見込みであります。

3つ目として、両校を閉校し、それぞれ近隣校へ通学するケースでございます。北小野の子どもは塩尻市の近隣校へ、小野の子どもは辰野町の近隣校へ通学する方法でございます。

4つ目として、両校を閉校し、地域全体で同じ学校へ通学するケースでございます。両小野地域の子どもたちが、今の学園同様、育ちも学びも一緒に、集団で塩尻市または辰野町の学校へ通学する方法でございます。

いずれの案につきましても、利点と課題があるかと認識しております。また、このほかにも、両小野地域の子どもたちにとって最適な教育環境の在り方もあろうかと思っておりますので、本日は御意見を伺えればと考えております。説明は以上となります。

**百瀬こども教育部長** ただいま事務局から説明がございましたが、先ほど教育委員会のほうでもかなり意見が出ておりましたが、児童数の減少によりまして、いろいろな弊害が出てきているというお話がありました。2ページにありますように、昨年生まれた両地区のお子さんが既に8名ということで、10人を切っているという状況という中で、かなり前からそれぞれの学級が単級となっております。これをどうしていこうかというのは、両小野学園でも今後検討していくような形になっておりますし、昨日の市民タイムスにおきましても、学校の児童数の減少についての課題などが出ておりました。ちょうど両小野中学校の様子も出ておりましたので、そういったものも踏まえて、今日、それぞれ皆さんのお考えといえますか、現状を把握していただいて、それぞれ御意見を伺いたいと思います。

教育委員の皆さん、教育委員の中にも教員の経験者、保護者枠、地域の方々、それぞれおられますので、それぞれのお立場から、ふだん感じていることや周囲から聞こえてくる声もあろうかと思っております。また、資料に対する御質問でも結構ですので、まずお出しいただきたいと思っております。まずは教育委員からぜひお願いしたいと思っておりますが、口火を切っていただいてもよろしいでしょうか。

**両角教育長職務代理者** 状況は今説明にあったとおりですが、人数がまず減っていくということを食べ止めるということが一つあると思うのです。それで、塩尻のほうでは、しおじり街元気カンパニーというところ、あるいは市と両方で空き家対策とか、それから、塩尻に小野へ住んでみたいという人が多少いるということなので、そういう人たちがうまくというか、楽にというか、住めるような状況をつくるという、そっちの方向で、魅力ある小野、たのめの里とっていいのか、そういうことをつくっていくという、それが、まず人数を減らさない、あるいは、増えるということはありません。今の20人前後の人数ができるだけ長続きすればいいなというようなことを思います。

それと、現状では、この地域で生まれ育った人が外へ出ていく。高校で出ていくのですけれども、その後、大学で必ず、ここには大学がありませんので、出ていくと帰ってこないということがあるわけですが、生活する年になって、結婚したりいろいろ、そのときに、生活するのだったらこのたのめの里がいいなと思うような教育を小学校・中学校です。そうすれば、ここから生まれ育った人たちがまたここへ帰ってくるということになれば、人数が減っていくことを食い止める一番のいい方法ではないかと思っております。

だから、そのために学園協でも学校教育の目的は、たのめの里に行って教育を受けると、すごく勉強になるし、いい大学へ行ったり、いい生活ができたりする方向に行けるよというような感じになると、この大きな魅力になって、まず人数がすごく減っていくというのを食い止めることができるのではないかなど。まずできることはそこをやらなくてはいけない。

ただ、どうしても減っていくということは、今の世の中、どうしても食い止められないことですので、そうするとどうなるかという、最後のページに、組合立の学校再編の一般的な例。一般的な例はやめまじょうと、私は思います。

四国のある学校は、県をまたいで学校があつて、今年が最後で、来年はもう片方へ移ってしまうのだけれども、移るといふか、6人になってしまうのです。その親たち、あるいは、そこにいる住民の人たちが、6人だと、学力がどうしても落ちてしまうので、近隣のある程度大きな学校へ移したほうが絶対にいいと、そういう考えになつてしまつて、結局は、せつかくの県をまたいでの小中一貫校だったのが、来年度からなくなつてしまひます。

そういうことになるので、先ほども言つた、人数を減らさないということと、それから、少人数になつても、その人数までいつたらまた考えないといけないのかもしれませんが、最後のページの、ここの学校を残すということの大前提に、まず学園協もそうだし、ここの地域全体が一緒になつて考えていくという、それは大前提にして、絶対に学校をなくさないというふうにできればしたいなと思つています。

ただ、先ほども説明にありましたけれども、非常に難しいところなのです。教育会とか、とにかく違うので。それから、私、3年前の御柱では奉祭会長というのをやらせてもらつて、小野の矢彦神社の御柱と小野神社の御柱を、協力体制を取ろうと思つて、少し動いたのですけれども、駄目でした。何で駄目だったかという、組織的なこと、考え方が全然違うということでした。それぞれがそれで満足しているわけです。そういうふうにしたいという考えもあるようです。そうすると、地域の生活というの、ここでいうと、御柱はすごく大きなお祭りですので、それまで崩してということ、まずできないのではないかと思つたのです。

そうすると、先ほどの残す、義務教育学校にするためには一つの、どちらかに。辰野町なり、管轄している市町村が一つでなければいけないということは当然、文科省で決まっている部分であるわけですが、今のところ。そうではなくて、これを崩すことはできないのかなと。要するに2地区、辰野町と塩尻市で、両方で1つの義務教育学校はできないかという。日本にはありません。だけれども、そういうふうになれば、両方からお金をもらつて今もやっているわけではないですか。

昨年などは、ソーラーとかいろいろで辰野町からたくさんのお金を頂いて、いい学校にしてもらつている。そういうふうにお金を出していただいているということがあれば、今後もそういうふうにして、この学校を残すので、ぜひ両方からできるだけ、御柱もそうですし、ここの地域、歴史、いろいろが非常に名のあるものがいっぱいあるので、ぜひ、そういうふうにしてお金をもらえと、結構いろいろできるのですが、そういうような形で、ここにあるような形ではない形が何とかできないかなと思つてはいるのですが、難しい話になると思ひますけれども、そんなふう希望としては持っています。以上です。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。続いて小澤委員、いかがですか。

**小澤教育長職務代理者** 何からお話ししたらいいか分からないけれど、先ほど両角委員からも話がありましたけれど、少子化ということで、児童生徒をいかにして減らさないといふか、増やせばいいなということで、昨日、市民タイムスに百瀬市長が記載されたのを読ませていただきましたが、そういう対策が必要、いい方法があればいいなと考へております。

過去を振り返りますと、72年前に組合立が発足し、現在まで72年間やってきたのは先人の知恵だなど。別々だったらどんな状態になつたかなという感じなのだけれど、小野の学校を存続させる一つの知恵だったのかなというような形を考へております。

私の若い頃は、年配の皆さんはそれぞれ北小野と小野の小学校、中学校を出たわけですから。ところが、それぞれのそういう体験をされた皆さんは大分年齢が上がりまして、人数が大分少なくなつて

おります。85歳前後より下は全部、両小野小学校・中学校を出ているということで、学校に対する思いというのは強く、両小野に対するそういうお気持ちは持っているのかなというふうに思うわけですね。

もう少し現在に近づいてきますと、両小野で児童生徒数が増えたときがあります。昭和50年代、そこに春宮という地区ができたのですが、私が調べたら、そのときは小学校で100人近くが増えました。中学校も50人増えたので、それで存続ができて延びたのかなと思うわけですね。

先ほど、ここを巣立った子どもたちが結構出ていってしまうというところが、一つは店がコンビニしかないのですね。そのほかのいろいろ周りの施設的なものもだんだん、昔に比べて少なくなってしまっているのかなと、そういうところも一つ影響しているのかなというようなことを思っております。

小野というのは、今から100年くらい前に岡谷と小野で大々的に製糸業をやっていて、高山とか愛知県からも入ってきて、そういう人たちもここへ住みついたということもあるので、何か産業みたいなもの、働くところがしっかりできてくると、先ほどのことが改善されるのかなと思いました。

最後ですけれども、この図面が大変参考になったので、いろいろ考えられるところもあるのかなということで、まとめていただいてありがとうございました。要望というか、いろいろあるのですが、そんな形でいけばどうかと。以上です。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。それでは、小幡委員、よろしくお願いします。

**小幡委員** 先ほど、両角職務代理が言われたように、ここに帰ってきたいという地域にしていけたら、それが誰にとっても住みやすい地域になるのではないかなというのはいさぐく感じました。

私も昨年、教育委員を拝命しまして、なる前は、全然地域のことに無関心というか、新聞にも載っていたと思うのですが、そういうものにも全然目を通さなかったのですが、私のように無関心な方も結構いるのではないかなと思うので、この地域に住まれている方々に、教育盛りの子どもたちを持っている人たちの中でも、そんなに危機感を感じていない方たちもいるのではないかなと思うので、地域の方々と持っている委員会でも話し合っているのですが、そういうことを地域の方にどういうふうに発信していくかということが、結構問題になってくるのかなということも思っているところです。まだまだ勉強中で、よろしくお願いします。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。それでは、小澤委員、お願いします。

**小澤委員** 枠を言われてしまうと、そんな話をしないといけないのかなと思うのですが、私も昨年からは、こういった形で委員をさせていただいているのですが、やっていく当初は、そこまで大きな役割ではないというくらい、別に今までが駄目だったとか、悪いかいいとかではなくて、今回この話が来たときに、なぜに私がというくらいに、発してしまったくらい、小幡委員の言葉をそのまま借りてしまうと、興味がないわけではないです。そういう状況に陥るということは知ってはいました。けれど、そこから先、何を考えようかということは、自分としては一切関わってこなかったのですが、今回関わらせてもらったことに対しては感謝する気持ちであります。

事の発端としてという形でいろいろ御説明いただいたところもあるのですが、両角職務代理、小澤職務代理がおっしゃっていましたように、ここの地域自体が衰退する一方なところに、どうやって子どもを増やそうか。もっと言えば、御家庭の方たちが戻る、もしくは新しく来てもらうという要素がない限りは、現状維持は全て、一切は衰退していく環境になっていくので、地域としても、小野としても、何かやっていかなくてはいけないかもしれませんが、それぞれ市・町として、ここに何か復興を与えてくださいというわけではないのですが、働く場所、もしくはお店があることということが結構起点になるのではないかと思います。

一つとして、きりとうという裏にある施設に、働いている小野の地域の方が結構いまして、ふた

を開けてみたらいるのですね、あなたもいるのですねというくらいに、この間、日曜日にきりとうやまびこフェスがありまして、知っている方たちのお母さんや知り合いの方もいたくらいです。一つのきりとうをとっても、働く場所があるだけで、そういった形が取れる。

もっと言えば、小学校や中学校に、先ほど部活の話も出ていたのですが、お迎えに行くといっても、時間の中での役割として、親としてみれば、子どもに対して何かしてあげたいとしても、遠くに働きに行っていれば、やはりできなくなる。今までは近いところに企業があったから、この小野が存続していたというのも一理あるのではないかと思いますので、まずもって、ここを復興させる何か一つの起点が生まれてくればいいかなと思いますし、地域としても生まなくてはいけないと思います。

それと、これから減少していく中というところで、両角職務代理がおっしゃっていましたように、私も、大変皆さんに失礼な言い方ではありますが、行政は関わりなく、ここの地域の中に小学校と中学校を残したいという思いは、今回こういう関り合いを持った形もあって、余計に強く思います。ですので、ぜひともここに保育園、小学校、中学校があるから家庭がいる。家庭があるから、この地域が復興する。この地域が復興していくから、これからまたさらに回っていくという、一つの起点の中にここの施設として、小学校、保育園、中学校がなくてはならないものだと思いますので、できる限り自分としても協力していくところではありますので、何かしら対策だとか、予防策、もっと言えば促進剤というものができたところに、改めて、この小中学校を残すための課程をどうにか取っていきたいと思うので、そんなところに自分としても関わられたらと思うので、よろしくお願いいたします。

**百瀬子ども教育部長** ありがとうございます。それでは次に、それぞれの学校長から現状だとか、また、保護者の方、教職員などから何かお話があったりすると思いますので、小学校の根橋校長先生のほうからよろしいですか。

**根橋両小野小学校長** 子どもが減っていくということの中で、学校として、例えば行政に何かをお願いするとかということは、住民を増やすとか、私は、そういうことはお願いする立場ではないと思っています。教員というのは、どうしても1校に10年も20年もいられるわけではないので、自分としては、子どもたちやおうちの方にとって、この学校へ通わせたいなとか、子どもたちが毎日来たいな、楽しいなと思えるような学校づくりをしていくことが自分の役割かなというふうに思っています。

先日、教育長に無理を言って、来年度から義務教育学校になるという栄村の栄小中学校のほうへ授業を見せていただきに行ってきました。ここよりもまだもっと少ない人数なのですけれども、その中で学校を挙げて、子どもたちにとってどんな学びがいいかというような実践を5年以上されているということで非常に参考になったので、その研修報告を先生方にしながら、こんな形はどうだろうという提案を今はしながら、また来年度の学校運営に生かしていこうと考えているところです。いずれにしても自分ができることというのは、学校を魅力的にすることかな。どのくらい先生方と気持ちを合わせて、力を合わせていけるかというのは、今、そんなに自信を持って言えないのですけれども、でも、そういう方向で自分はやりたいと思っていることが1つです。

もう1つは、もし希望が言えるとしたら、保育園をきちんと残していただきたいということ。若い方々が入ってきて子育てをするときに、保育園がないと、自分たちが働くというところで影響が出てしまうということがあるので、そのことは感じています。

もう1点、昨年度、保護者の方といろいろ話をする中で、びっくりしてしまったことがあって、それは、両小野小学校を卒業したら、辰野中学校に行けますかという質問をされたことがあります。どうしてですかとお聞きをしたら、大勢のところでは部活動とか、そういう機会をもらいたいはっ

きりおっしかったです。なので、私たちは、今の小学校の保護者の方、ちょうど10代の子どもたちを持つおうちの方や保育園のお子さんを持つおうちの方がどんなふうに、こういう人数が減ってしまって、例えば中学校の先生方が少なくなっているとか、部活が少なくなっていることをよそから聞いている状態の保護者の方がどんな気持ちでいるかというところは、早いうちにお聞きしたほうがいいのではないかと、そのときは思いました。

なので、先ほど両角職務代理から出てきた、みんなが、あっちに行っただけで学力がつかないかというような気持ちになってしまっただけでは遅いのかなというような気がしているので、早く保護者の方には意見を聞けるような場があるといいのかなと考えたりもしています。以上です。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。両小野中学校の富田校長先生お願いします。

**富田両小野中学校長** 私、前任校が下伊那なのですけれど、その学校は、中学校が統合されてなくなった地域でした。中学校がなくなって、小学校だけは残ったのですけれど、人口の流出が止まらないという話でした。合併した中学校により近いほうに移ってってしまうというか、そういうことでした。

ですから、学校は、地域にとっては地域を残す一つの柱になっていくのだろうなというふうに思っていて、先ほど両角職務代理が言っていたのですけれど、地域に帰ってくるというだけではなくて、地域の柱がなくなるということは、人がそこに住まなくなってしまうということなのだろうというふうに思って、帰る場所もなくなるということだなというふうに思います。

ただ、今度は中学校の立場から言わせていただきますが、小学校と中学校の大きな違いは、小学校は学級数分だけ担任がいるのです。中学校は教科が10教科あるので、10人職員が配置できるかという、今の両小野中学校の現状では7人しか配置ができない。ということは、あと3教科の先生を組合費で雇っていただいている。

だから、音楽の先生は週2日しか来ない。美術の先生も週2日しか来ない。家庭科の先生に至っては週1日しか来ないという状況で、この間もある子が、高校の入試に美術の勉強があって、勉強したいと私のところに来ました。それで、何とかありませんかということで。ただ、美術の先生は、市に雇っていただいているので、県費の先生と違って、勤務の時間が4時半までなのです。だから、部活動の時間に特別に見てもらおうということができないのです。

そういうこと、子どもたちの要望に応えられないのです、今の中学校では。それは本当に切ないなという現状なのです。例えば今、両小野小にすばらしい音楽の先生がいるのです。吹奏楽の子たちをすごく育ててくれる先生がいるのですけれど、吹奏楽の先生は中学校にはいないのです。

それなので、小澤委員のときもあつたのですけれど、どうやって残していくのかという話をぜひしてほしいというのですけれど、残したくても残せない。それはなぜかということ、教員がいらないから。という現状でなっていくと、この施設分離型というのは非常に厳しいのです、学園として。学園の中にいるのです、すばらしい先生がいるのですけれど、学園の中でありながら、来ていただけないのです。ということで、施設が一つであれば、来てもらえるのです。

例えば、その音楽の先生に、うちに教えに来ていただくことはできるのです。でも、教えに来ていただいたときに、現状だと、中学の職員が代わりに行かないといけないのです。よく教員の中では、行って来いというのですけれど、1人来てもらったら1人行かないといけない。だから結局、数が足りないのです、中学としては。

ということで、今の中学の現状で、子どもたちの要望に合った勉強の質を維持するというのは、すごく難しいのだなというのを、大人は考えていかないといけないのだなというふうに思います。子どもたちの勉強したいという思いに応える学園をつくっていかないといいなというのは、私、ここに来るまで全然感じなかったのです。両小野中は学園をやっているのだなくらいに思っていた

のですけれど、自分がいざ入ってみると、部活動も大事なのです、学びですから。子どもたちがこういうことを部活動で学びたいということに対して応えられない。

例えば、今年は美術の先生が部活動を見ますよと言ってくれたので、特別に組合のほうから手当てをもらって見てもらったのですけれど、やはり無理でしたということで、来年は美術部の顧問がいなくなってしまうのです。それで、先ほども申したとおり、来年の美術部の募集を止めざるを得ない。多分、小学校には美術部やりたいと思っている子もいっぱいいたし、今年の文化祭でもいろいろな展示をしているのを見たら、中学に来たら、こういう美術部で絵を描けるのだなと思った子もいたでしょうけれど、それが維持できない。

だから、そこを何とか、そういうことに応えられる学園の形というのを、簡単にいうと、一つになれば、かなり的人数がいるのですけれど。そういうふうになっていくといいなと思いますが、行政とかブロックとか、そういういろいろな壁があって難しいのかなと思っています。

先生たちは子どもたちを見ているだけに、要望に応えられないジレンマというのは、どの先生も持っているのかなという感じがします。以上です。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。それでは、両教育長から、みなさんの御意見をお伺いされたと思いますが、それも踏まえて、まず塩尻市の佐倉教育長からお願いします。

**佐倉教育長** 今日はありがとうございました。様々な考え方があるというふうに私は思っています。この両小野学園だけではなくて、学校の在り方を考えたときに、当然、考えていかななくてはいけない視点は、今、富田校長先生からもありましたが、子どもたちからの視点。あと、子どもたちを育てていただいている御家庭、保護者の視点。さらに、地域の視点。それぞれ大きく3つあるかと思っています。当然、私が改めて言う必要もないことですが、やはり一番考えないといけないのは子どもの視点がどうなのか。子どもたちにとって学びの環境、今の両小野小・両小野中の子どもたちの学びの環境も絶対に整えないといけないという思いで教育委員会を扱っているつもりです。

そうしたときに、学びの環境を整えていく、子どもたちにとって、どういう学びの環境がいいのかということは、今校長先生方から言われたことが、今の時点でも考えないといけないなということでは思っているところです。

今日、中学校組合教育委員会のところで部活動のことが話題にあったときに、私は、部活動のことを一つ考えても、今の子どもたちにも環境を整えないといけないということは思っています。その一つが部活動の地域展開なので、ここに学校がある中でも、子どもたちに、学校規模が小さいから部活動を諦めないといけないとか、何々を諦めないといけないということは極力少なくしていきたいと思っていますので、部活動については地域展開のことをしっかりやっていきたいと感じていますし、今、校長先生とここで話をしないといけないと思ったのですが、美術部だっただけでなくさないといけないのか、方法はあるのではないのかなど。例えば、塩尻中学校とオンラインでつなげて一緒に部活動をやるとか、そういうことだっただけではないのかなとか。

まだまだ工夫できることはあると思うので、また皆様のお知恵も頂きながら、今の子どもたちに対しても、この先の子どもたちに対しても、学びの環境を整えるということはしっかりやっていきたいと感じました。何の結論もありませんが、以上です。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。宮澤教育長お願いします。

**宮澤教育長** 皆さんの御意見をお聞きして、先ほど両角職務代理のお話の中で、小野と北小野とでなかなか考えが一つにならないという部分の話がされたのです。そういうことが今でもあるのだなと。確かに400年以上も前に、この唐沢川で分かれてからそうなっているということをよく聞くのだけれど、地域はずっと400年前から南と北に分かれてしまって、考え方も違うような状況で来てしまったのだけれど、3回ほど前の御柱のときですか、なぜ一つの統一したポスターになれたのかとい

うのは、あれは子どもたちなのです。地域の人たちが、小野と北小野で分かれて、地区が違って、御柱も全然離れて別にやるのだけれど、子どもたちは、そんなことは関係ないのではないかと。子どもたちは川を挟んでこっちだ、あっちだということを言わない。一つの学校で一緒に学んでいる。一つの教室で学んでいる中、それで大人が学ばなければいけないといって、初めて統一したポスターができた。今でも統一したポスターが続いていますね。

そこで、この地域の教育をどうするのか、子どもたちの学びをどうするのかといったときに、両方の地域の皆さんが本当に一つになって、子どもたちをどうするかという、これを考えていくことが大事ではないかと。学校の大きい小さいで、先ほどから出ていますけれど、やりたいことができない。これはあってはまずいと思うのです。学校の規模によって教育格差、これは出してはまずいのではないかなというのは、私の一番の思いなのです。

辰野町にも、大きい学校、小さい学校あるのだけれど、これは同じにしていけないといけない。そうすれば、両小野地区の子どもたちの学びも、例えば小学校でいったら、辰野町内の他の小学校と同じ学びや活動は保障してやりたい。両小野中でいったら、両小野中の学びは塩尻市の他の中学と同じ学びをさせてやる、やりたい、やらなければいけないだろうなと思うのです。

では、どうするかというのが、これは非常に難しいのだけれど、一つは、これからということを考えると、さっきから出ているのだけれど、地域がどう考えているか分からないけれど、義務教育学校という形。施設分離ではなくて、一つにした義務教育学校でとにかく1年生から9年生までの学びという、一つの大きな集団にして。そうすると、先生の数も増える。それをまず考えていく必要があるのではないかと思います。ハードルは高いと思います。

**百瀬子ども教育部長** ありがとうございます。それでは、最後に両組合長のほうから、それぞれ御意見をお願いしたいと思います。まず、武居組合長からお願いします。

**武居小学校組合長** ただいま委員の皆さん、また、両学校長、教育長の方々の御意見を聞いて、一つ一つ感じる場所があって、お話ししたいことがあるのですけれど、しゃべっている間に時間がたってしまうので、総じてお話ししたいことがあります。

現在、両小野地区の小学校・中学校をどうしていくかという問題は、8年前に私が町長に就任した直後の大問題が、山を越えた川島地区の小学校の存廃問題にぶつかりました。それ以前、宮澤教育長のもとで学校の在り方検討会も開かれて、何十回と審議されてきている中で、一つの目安は1学級10人という、教育効果を考えたときに、そういった数字的な目安をつくっていただいたことがまず大きかったかなと思います。

現状、1クラス10人どころか、1学年で10人前後の児童数になってしまっていましたので、とはいっても、川島という広い中で学校が果たしてきた役割、できることなら残したいという方向で、私も3年間のチャレンジ期間を頂いて、存続の方向で動きました。

結論を言うと、統合やむなしで結論づけたのですが、一つ、こういう現象が現れたのです。川島という、辰野町の中でも、四季折々のいい風景の見られるところでもありまして、長野県の移住モデル地区にも指定されているところですので、結構若い世代の皆さんが入ってきておりました。子どももそこで教育したい。それはいいのですけれど、さっき根橋校長先生が言ったとおり、かなり十数年前に川島児童館という保育園的な施設が廃止になってしまったのです。そうすると、働かなければいけない中で、自分の子どもを預ける場所がないという問題もあって、少なくとも、小学校は残してくれという要望でした。そういうこともあって、移住者の方は何としても残してくれと。その一方で、もともと地域住民の皆さんは、例えば、お孫さんは多くの児童のいる辰野東、辰野西小学校とか、大きな学校で学ばせたい。ですので、地域の方は児童数のあるところへ行かせたい。移住者は、こういった面倒を見てくれる小規模でいいと。そこでねじれた現象が同じ地区内で起こ

ってしまって。

これはあるところで、存続派と統廃合派の両方に分かれてしまったのですけれど、私、分断という言葉を使ってしまったのです。完全に、小学校をどうするかで地域が分かれてしまっているのではないですか。この分断現象を何とかしたい、この気持ちを分かってくださいと言ったら、町長何を言っているのだと、川島は一つだと。だから、両方の方が地域を愛する気持ちは一つだったのだなということがまずありました。言葉は選ばないといけないなということが、私は勉強になったのですが。

その中で一つ、私が最終的に存続を諦めたのは、さっき言ったとおり、地域の皆さんが、児童数の多いところで学ばせたい、その気持ちだったのです。私が何とか残したいという気持ちも、地域の皆さんは分かってくれましたけれど、何軒か、もし地域の小学校に入れてくれるような動きがあったら、まだまだ頑張ったかもしれませんが、その傾向が全く見られなかった。

今後、この両小野地区の小学校・中学校も、いずれは地域の皆さんを巻き込んだ動きになってくると思いますが、最終的には、地域の皆さんがどう思うかが非常に大きなポイントになってくるかなと思います。以上にて、お願いしたいと思います。

次に、両学校長からは特に4ページの学校の現状について、実際に児童生徒、保護者、教職員などと接しているなかで感じる良い点や課題、再編を検討していくにあたり考慮していくべき事項などを共有していただきたいと思います。

**百瀬こども教育部長** ありがとうございます。最後に、百瀬組合長お願いします。

**百瀬中学校組合長** 簡潔に申し上げますけれども、こういう話をするときは、どうしても思考回路がネガティブとかマイナス思考になってしまうのですが、こういうときこそ、ポジティブでプラス思考で話をしたほうが、いい結論が導き出せるのかなと思いました。今日は貴重な意見を頂きまして、ありがとうございます。

1点だけ、教員の話がありましたけれども、県の市長会としても、小規模学校における専科教員の配置基準の見直しについてということをして市長会で取りまとめ、県に要望をしてありますので、そういったところは、全体のそういった組織も通じて、しっかりと要望していきたいと考えております。以上です。

**百瀬こども教育部長** どうもありがとうございました。本日は、様々なお立場から御意見を頂きましてありがとうございました。今日、何かまとめるということではありませんので、それぞれの御意見を共有していただきまして、また両小野学園のほうで、年内には組織ができるとお伺いしておりますので、そういったところで参考にさせていただきたい。また、前回の会議の中でも話がありました、辰野町も塩尻市も両教育委員会が幾らでも協力をしながらやっていきますというお話をしておりますので、ぜひ行政も一緒になって考えていきたいと思います。よろしくをお願いします。

本日出た意見は、会議録として残しますので、それをまた皆さん見返していただいて、様々な意見が出たということを再認識していただければと思います。

司会の進行が悪くて会議の時間が長引いてしまい、大変申し訳ありませんでした。

## 5 閉会

**百瀬こども教育部長** それでは以上をもちまして、本日の総合教育会議を終了といたします。ご協力ありがとうございました。

○ 午後2時45分に閉会する。

以上

【辰野町塩尻市小学校組合】

組 合 長

---

教 育 長

---

同職務代理者

---

委 員

---

記 録 職 員  
学校支援課教育総務係

---

【塩尻市辰野町中学校組合】

組 合 長

---

教 育 長

---

同職務代理者

---

委 員

---

記 録 職 員  
学校教育課教育企画係

---